

みちのく紀行

神崎辰雄

(会員・鶴見町大島)

いつからか、みちのくの旅に出たいと思っていたところ、このほどその念願がかなった。

まず、日本三景の一つ松島を訪れた。湾内に浮かぶ約二六〇の島々にはクロマツやアカマツが生育し、浸蝕により奇観を呈している。五大堂からの眺望もすばらしい。湾岸には伊達家の菩提寺、瑞巖寺がある。正式名称を松島青龍山瑞巖円福禪寺と称し、臨濟宗妙心寺派に属している。開創



瑞 巖 寺

は天長五年（八二八）慈覚大師円仁で当時は天台宗に属し、延福寺と称されていたとのこと。戦国時代を経て寺勢は衰えていたが、江戸時代の初め、伊達政宗公の改築により、現在の大伽藍が完成したという。

工事は慶長九年（一六〇四）より始まり、紀洲熊野より樺・桧・杉の良材を求め、天下の名工を集めて、足かけ五年をかけて完成したという。本堂の桁行きが39m、庫裡は14mで、25mの梁間があり、20室もあるという。いずれも桃山美術の粋を集めた彫刻、彩色など、規模の大きさに目を見張らされた。

翌日は、伊達六十二万石の仙台を訪れた。二十二才で奥洲に覇をなした政宗、青葉山には野面積み・打込みはぎなどの手法が使い分けられた壮大な城址の中に、馬上



伊達 正宗 像

豊かな政宗公の像がある。

島崎藤村、土井晩翠の詩碑も建てられている。

独眼竜と呼

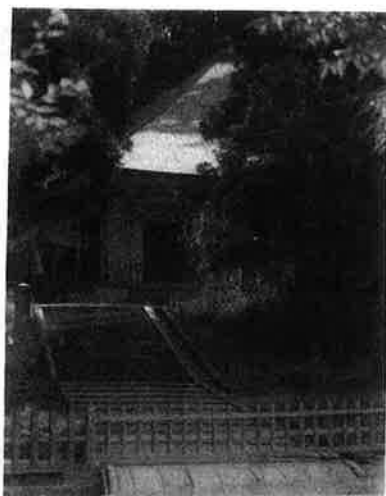
ばれ、武勇に秀でた政宗も生涯独眼を気にしていたのか、自分の死後の像には両眼を入れるようにと遺言をしたと言われている。

曇りなき 心の月をさきたてて

浮世のやみを照らしてぞ行く

政宗公の辞世の句である。

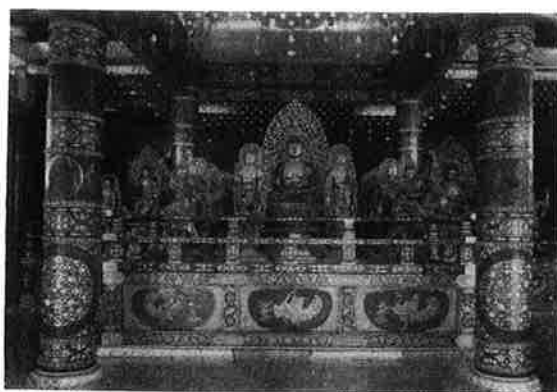
奥洲といえはなんと言つても平泉、藤原三代の中尊寺である。天台宗・東北大本山、山号を関山かんといつて慈覚大



中尊寺金色堂

師を開山としている。前九年（一〇五一—一〇六二）、後三年（一〇八三—一〇八七）という長い戦乱で亡くなつたひと達の霊をなぐさめるため、藤原氏の初代、清衡公が多宝塔や二階大堂など多くの堂塔を造営したと言われている。

金色堂は天治元年（一一二四）の造立でまず内部の装



金色堂の須弥壇

飾に目をう

ばわれる。

四本の巻柱

や仏壇長押なげし

まで白く光

る夜光貝の

（螺鈿らでん）細

工、透かし

彫りの金

具、漆の蒔

絵と、お堂

全体があた

かも一つの

工芸品の感

じがする。

仏像は本尊阿弥陀如来、その前に蓮を持っているのが観音・勢至菩薩、左右に三体ずつ列立する六地藏、みな円満な相好である。そして中央須弥壇しゆみだんの中に初代清衡公、左に二代基衡公、右に三代秀衡公の遺体と泰衡公の首級が納められている。

元禄二年（一六八九）、芭蕉は「おくの細道」最大の目的地である平泉を訪れた。芭蕉はその栄華をしのび、そして無常というべき世の移り変わりに涙した。

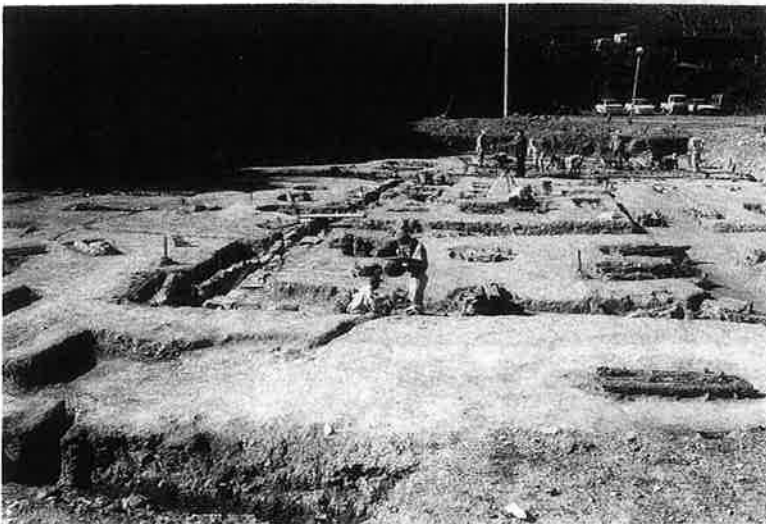
金色堂の近くに芭蕉の立像がある。

五月雨さみだれの降のこしてや光堂

延享三年（一七四六）建碑とある。うっそうと繁る大杉の木立、少々の雨が降っても光堂は濡れることはないであろうと思った。

みちのくはまだまだ歴史に包まれた多くの文化財を残している。

旅情をそそる豊かな駄菓子が多い土産品店を横目に、ロマンの町を後にした。



天祐館跡地の発掘現場全景